国際視野研究会 国際緑内障研究会 見聞録

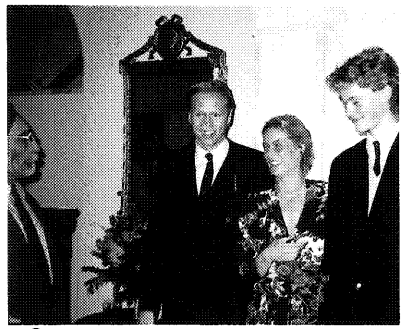
大阪市湖崎眼科医院
院長 湖崎 弘

9月8日からアムステルダムで開かれたI・P・S（国際視野研究会）とI・G・C（国際緑内障研究会）に参加した。13日まで熱心な討論が行なわれたが、各国のドクターと旧交を暖めたほか、ツアーにも参加して初めて訪れたオランダでの見聞も広めてきた。その一端を写真を中心にご紹介しよう。

スケジュール

9・5（金）	伊丹→成田発20・55 KLM便。
9・6（土）	早朝、アムステルダム着。市内観光
9・7（日）	午前中観光。午後I・P・Sの発録 19・00ウエルカムパーティ。
9・8（月）	8・30より学会。18・00船上ディナー。
9・9（火）	8・30より学会。14・00バスツアー。
9・10（水）	8・30より学会。19・00ディナー。
9・11（木）	アムステル郊外I・G・C会場へ移動。 19・00ウエルカムパーティ。
9・12（金）	8・30より学会。15・00バスツアー。
9・13（土）	8・30より学会。13・30ボートツアー。
9・14（日）	14・20KLM便にて出発、帰国の途につく。
9・15（月）	18・30伊丹着、帰国。

■グレーブ教授夫妻と息子、左はヘイレー教授①



①

グレーブ教授（オランダ）は今回のI・P・S（国際視野研究会）、I・G・C（国際緑内障研究会）の運営を担当。I・P・Sでは初代の事務局長で、日本にもたびたび来ており、私のクリニックも訪ねてくれた。新しい視野計を開発。日本からは古野講師（東京医科大）ら数名が留学した。三人ともスリムでノッポ、九等身というところか。

ヘイレー教授（アメリカ）は乳頭循環の仕事で有名。

■ボート上のドランス教授夫妻とアーマリー教授夫妻②

ドランス教授（カナダ）は、現在I・P・S、I・G・C両方の会長を勤めている。非常におだやかな人柄で、夫人は人あたりのいいイギリス女性。教授が二つの会長を勤めているのは夫人の内助の功が大きいからでは…。

第2回I・P・S（西独チュービンゲン、1976年）以来、仲よしとなり私のクリニックの月例会で講演してくれたこともある。

アーマリー教授（アメリカ）はステロイド緑内障の仕事が代表的。かつては闘志満々で学会場では〝吼えるライオン〟といわれたが、最近はすっかりおとなしくなった。緑内障の視野スクリーニングにアーマリー方があり、それを変えたドランス変方がある。

②

このI・P・S、I・G・Cとも毎日、学会主催のパーティがあり、講演の討論のつづきとリクリエーションが目的。このあと船上でダンスを見ながら楽しんだ。

■ボートツアーでの日本から参加したドクター③

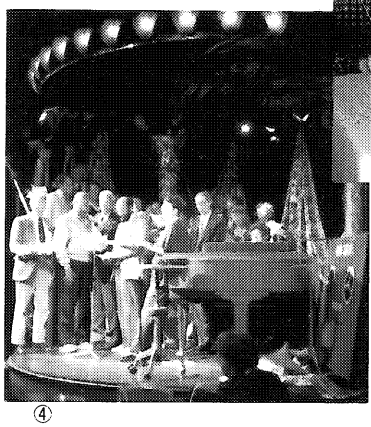
左から東教授（大阪医科大）夫妻、勝島先生（札幌医科大）、続木先生（同）、可児助教授（兵庫医科大）、近畿大勤務のORT湖崎裕子（私の二女）。ほかにI・P・Sに参加したのは松崎教授たちの慈恵会医科大グループ、岩田教授（新潟大）、北沢教授（岐阜大）、古野講師たちの東京医科大グループ、兵庫医科大グループ、飯沼先生（和歌山労災病院院長）夫妻ら総勢三十名。

■恒例の、お国自慢の歌披露④

I・P・Sは1974年以来、二年ごとに世界各地で開かれており、いつの頃からか国ごとに集まってそれぞれの国の歌を披露するパーティになった。写真はアメリカ組で人数は一番多かったが、一人で歌う国もある。

日本組は北原助教授（慈恵会医科大）の音頭で、〝幸せなら手をたたこう〟を全員で歌った。歌詞を急拠続木先生に書いてもらってコピーし全員に渡した。二年ごとにこんなことをしているので、皆が仲よくなるのは当然。

③



④

■レストラン「リド」でのディナーショー⑤

ハルムス名誉教授、アウルホン教授、東教授夫妻、岩田教授、湖崎裕子らがそろっている。

ハルムス名誉教授はチュービンゲン大学の主任教授を退職されたが、トラベクロトミーの手術でとくに有名である。何度もお会いしているが全くの紳士である。

アウルホン教授（チュービンゲン大）はチュービンガー視野計の開発と、緑内障の研究で有名。初代のI・P・S会長を勤められた。最近重病にかかられたが、見事にカムバックされた。

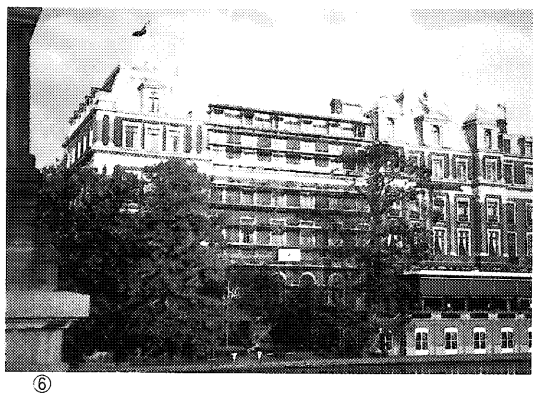
⑤

■I・P・S会場のアムステルホテル⑥

アムステルダムでは一番古く、由緒あるホテルである。狭いので昼食は裏のアムステル川にういた船の上でとらなければならなかった。

I・P・Sは1974年のパリを第一回として二年ごとに開催。第二回はチュービンゲン、第三回は東京、第四回はブリストル（イギリス）、第五回はサクラメント、第六回はサンタマルガリーター（イタリア）で行われ、今回が第七回である。

全演題のうち半分は講演、半分は展示で、私は第二回以来、毎回演題を出しているが、最近はあまりしゃべらなくてすむ展示が多い。今回は新しい試みとして展示のみの討論が約二時間かけて行なわれた。



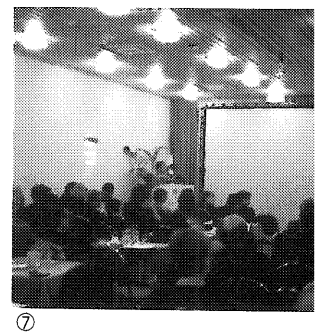
⑥

■I・G・Cの会場。演者は岩田教授⑦

この会はアムステルダム郊外の高級住宅地にあるジャンタバックホテルで開かれた。参加者は約百人。日本からは九人。

I・G・Cは会員制で、メンバーに選ばれることは緑内障の世界的権威である裏づけとなる。日本からは三島教授（東京大）、東教授、岩田教授、北沢教授が選ばれている。

四年ごとに開かれ、私はチュッチング（西独、1966年）、奈良（1978年）、カーメルバレー（アメリカ、1982年）に参加した。時間におかまいなく徹底的に討論するのが特長である。



⑦

■アムステルダム郊外の庭園を散策する著名人⑧

手前からアメリカから参加のモーメニー教授、アーマリー教授夫妻、ヘザリントン博士、シュワルツ教授とドランス教授（カナダ）。

■ダム広場の自動オルガン⑨

町角の自動オルガンはこの町の名物らしい。一人の男が帽子を出して金を集める。私も撮影のために金を入れた。こんなことで商売になるのは結構なことだ。

後ろは元王宮、現在は迎賓館。小さいが美しい建物である。ダム広場はヒッピー族の溜り場で有名であったが、取締りが厳しくなってスウエーデンに移っていったという。

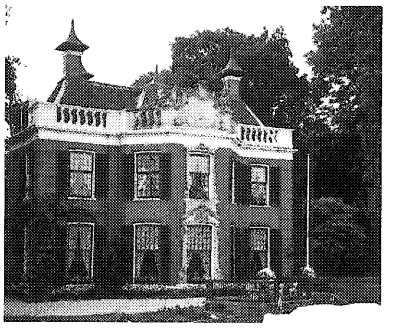
⑧

⑨

■運河ぞいにズラリ高級住宅⑩

すべて岸壁とヨットつき。窓はショーウインドーのようになっていて中がすけて見える。部屋の中の飾りつけも外から見られることを意識して飾り立ててある。

アムステルダムにはこのような高級住宅は数多い。日本とちがい相続税が安いので、このような立派な家が多いのか。日本では高い税金で個人生活が豊かにならず大きくなるのは会社ばかり…。



⑩

■マルケン島⑪

アムステルダム郊外には観光のための町が幾つかあり、マルケン島も、その一つ。今では地続きになっているが、オランダの古い町並を観光のためにそのまま保存してある。もちろん、人々は生活している。

この日は天気のよい日曜日。学会開催前でもあり、我々も久しぶりにのんびりと散歩した。空には飛行機雲が幾つか浮んでいた。

■オランダ名物の風車⑫

現在は稼動していないようで観光目的のために残されている。かつては排水、粉挽きなどに使われた戦争中のドイツ占領下では、風車の羽根の位置で地下組織の通信にも使われたとのこと。

近よってみると、ものすごく大きいもので、大した風もないのに回っておりその動力は大変なものであった。羽根には船のように帆が張られている。巻き上げると風車が止まるようになっている。日本のように台風が多いと、風車は吹き飛んで、堤防のない運河の水は忽ちあふれて町は水浸しになるのでは…。

⑫

⑪

■アムステルダム中央駅⑬

ガイドブックには東京駅の見本になったと書いてあるが、とても比較にならぬぐらい大きく、しかも美しい。私は近くを通るたびにあきずに眺めた。二つの塔の一つには大きな風向計が取りつけてあった。

⑬

■夜明けのアムステルホテルの対岸

運河の多いアムステルダムには無数のボートハウスがあり、電気も配線され、所番地もついている。川の使用料は必要らしいが、なぜこんな狭い、しかもゆれる船で生活するのかよく分らない。

地上は、すべて五階建てのアパートばかりだから、画一的なのを嫌って水上に逃れるのだろうか。市内の土地はすべて市有地とのこと。だから好きにまかせて個人の家が建てられないのだろう。

千寿製薬発行（銀海）1986年